

モン・サン・ミッシェル

Le Mon Saint-Michel

フランス共和国 ノルマンディー地方



上空から見たモンサンミッシェル 仏北西部の英仏海峡に面する島である 橋の部分は当時堤だった

2000年春、フランスのパリとその北西部、ノルマンディー(Normandie)の地に出かけた。

いつもの通り春休みに入って直ぐ、アムステルダム経由でパリへと向かい、ここに3日滞在。都心のカルチェラタン、学生街の安宿に泊まり、主に市内とヴェルサイユにあるフランス革命の史跡を廻った。4日目の朝、モンパルナス駅から大聖堂の街シャルトルへと向かい、そこを経由してその日の中に、モンサンミッシェルの入口と言って良いブルターニュ地方のレンヌへと入る。翌朝、駅前から車を借り出し、モンサンミッシェルとノルマンディーとをめぐる旅に出た。

ところで、旅のフランス語はどうしたか？元々30代の前半、御茶の水の「アテネ・フランス」※1で少しはフランス語会話を勉強したことがあった。今回は勤め先にあった図

書室から『サルにもわかるフランス語』なる語学書を借り出し、そのCDで事前に復習して臨んだ。文字通り、わかり易い内容だった。おかげで、レンタカー・ステーションで「使うガソリンは鉛入りですか、それとも鉛なしですか？」と受付のマドモアゼルとやり取りできた。安心して無鉛ガソリン車を運転して出発できた。北方の海岸部を目指す。

モンサンミッシェルへ

海に向かって緩やかに下る田舎の一本道を小一時間ほど走った。天気は残念ながら小雨がぱらつく悪天。それでも、やがて遠浅の海岸に浮かぶこの小島が、眼前にはっきりとその姿を現した。島に向かう堰堤の上に車を停める。島は写真に見る様に険しい岩山を成し、それを覆うように中世以来の石造りの僧

院がそびえたっている。土産物屋と飲食店が並ぶ海沿いの賑わう道を右手に歩き、まもなく石段が続く不整形の道を上るようになる。

途中、道沿いに石造りの小さな展望台が見えた。そこに上がって見ると、島を取り囲む海原が広がっていた。これが大変な遠浅で、遠目からでも水深のない海であることがわかった。近くの川からの堆積物が、立ちほだかる島の外側にうまく流れて行かないためなのだそう。おかげで海は波立たず静かで、潮騒は遙か北方の沖合からかすかに聞こえる程度だった。

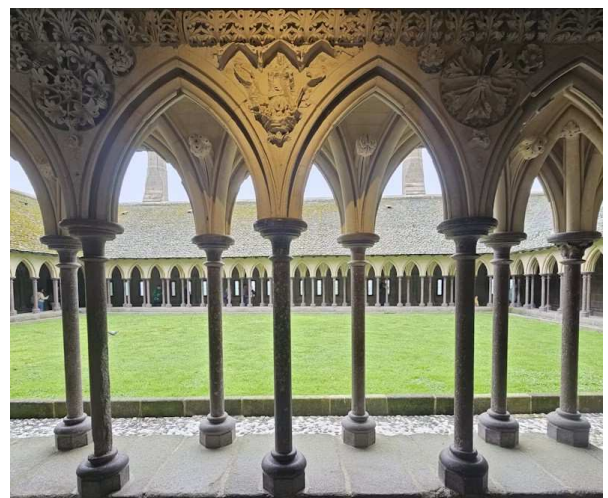
ところで、このユニークな小島の修道院は、どうしてできたのか？古くは 8 世紀初めに遡ると言う。近くのノルマンディー地方アヴランシュの司教オベールが、何度か「この岩山に聖堂を建てよ」と言う大天使ミカエルからのお告げを受けた。オベールは初めは信じなかったものの、三度目に脳天を勝ち割られる怪我を負い、漸くそれを信じたと言う。こうして岩山に修道院の建物が時代を追って建設されて行った。10 世紀にはノルマン人がこの地を支配したが、その公リシャールは現在に続く、ベネディクト派の修道院を後のゴシック様式で建てている。

修道院を訪ねる

島の中腹と言って良い位置に、僧院へと入場する門があった。ここで海拔 50m まで登ったことになる。その入場の前に、脇の公衆電話からカードを使って日本の家族へ電話した。「いよいよだよ」と……。この門をくぐっても、しばらくは外の石段を上る。やがて、視野が開けて海拔 78m のテラスへと出た。そこにゴシック様式の礼拝堂が建っていた。中に入ると、灯りが乏しい室内には、特に印象に残るものはなかったが、四方からの風を受けてもびくともせぬよう、石造りの

構造は盤石だったように思えた。

礼拝堂の隣には、修道院に付き物の中庭を囲む回廊があり、その中庭には刈り込まれた緑があった。見上げると礼拝堂のほぼ真ん中から突き上がるように、青銅で葺かれた尖塔が伸びていた。塔頂部には大天使ミカエル（ミッシェル）の金色の像が据えられている。小さくて分かりにくい。それもそのはず。頭頂部の高さはさらに 70m もあるそうで、針のように屹立していた。



狭い台地にも修道院に付き物の中庭と回廊が…

装飾を抑えたゴシックの修道院は、凛とした厳しさを見せていた。ここから内部を下るが、これだけの石の重量を支えるため、柱が下に降りるほどに太くなる。その分平面のスペースは狭くなり、光の届かぬ場所へとなっていた。下方の部屋は、カロリング期にまで遡ると言う。あのお告げの話しがあった時代より前にも、この島には人の痕跡があったようだ。暗い内階段を下り、ほぼ入口レベルの高さで、外に出た。そして、往きに通って来た賑わう路を下って、島の外に出た。念願の訪問はかなったが、この地は遠くからの眺めが一番の魅力なのかもしれない。車を走らせて振り返ると、その絶景が印象的だった。

この美しい島は、フランス革命期には修道院が廃され、その後半世紀近く「第 2 のバス

ティュー」と呼ばれ、政治犯収容の島にされていたと言う。19 世紀半ば、この地を旅した作家のヴィクトル＝ユーゴー (Victor Hugo) が、その歴史的かつ文化的な価値を再発見し、保存と再興を呼びかけた。島は再び修道院として利用されるようになり、また巡礼の地として多くの参拝者が訪れるようになったと言う。

カンカル (Cancale) へ

さて、この後は西へと進みブルターニュのカキ養殖の中心の一つであるカンカルの街へと向かった。海から離れた国道から北へとずれて、海岸へ行く平野の道を走る。そこに突然、大きな岩塊の山が現れた。モン・ドルと呼ばれる、古代ドルイド教の聖地とされる場所だ。ドルイド教はケルト人が崇敬した自然信仰の一種で、この岩山や巨石などを崇拝の対象とした。この地をかすめて、再びモンサンミッシェルを遠望する海岸へと出ると、カンカルは間もなくだった。街へと至る海岸の道沿いの民家には、その外壁に早くも huître (ユイトゥール) とフランス語で書かれた牡蠣の壁絵が描かれていた。素朴な絵に何かユーモラスなものを感じた。

さて、カンカルの港に面するレストランの看板を見て尋ねると、店の奥がホテルで空いていると言う。そこで、今夜はここに泊まり、夕食は店の生ガキを賞味することにした。

まだ 3 時頃だったので、再び車を運転して、西隣の旧港、サン・マロ (Saint Malo) に向かう。迂回して海岸沿いの道を行くと、直ぐに Grouin 岬へと伸びる道が右手に別れる。どんな所だろうと入ってみると、何でも海鵜の群生で有名らしく、鵜のけたたましい鳴き声に驚かされた。午後の西から射す光は鋭く、その海景をくっきりと浮き出させていた。

サン・マロは、古くは 16 世紀に英仏海峡に

出没した海賊船の出撃基地だったとか。中世由来の城壁で囲まれたこの街は、着いた頃にはもう夜の闇の中にあり、石畳の道には人影もまばらで、来る時を間違えたのでは？と思わざるを得なかった。街路に面する壁から、古風な形の水素灯が突き出て、石畳をオレンジ色に染めていた。旧市街をゆっくりと徐行しながら来た道を引き返し、その城門から出てカンカルへと戻った。

ホテルに戻り少し身支度した後、階下のレストランへと足を運ぶ。注文したのは、大きな円皿に盛りつけた生ガキ 12 個。それにレモン汁をジュッとかけて、スライスしたフランスパンと一緒に食べる。美味しかった。粒状の氷をむらなく皿に広げ、牡蠣をその上に円を描くように並べて供すのは、さすが美食の国フランスだな！と感心した。レモンの黄色が華を添えていた。この日は、牡蠣を満喫した晩だった。



牡蠣のプレート こんな形だったと思う。

翌朝、今度は車を東に向け、ノルマンディーのコタンタン (Cotentin) 半島※2を目ざした・・・。

※1 1913 年創立の日本最古のフランス語学校

※2 ノルマンディー半島の正式名称